

耳鼻咽喉科診療の現状についてのアンケート調査結果報告

日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会地域医療委員会

日本臨床耳鼻咽喉科医会地域医療委員会

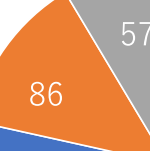
はじめに

日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会地域医療委員会は、日本臨床耳鼻咽喉科医会と協力し様々な活動を行っている。今回はアンケート調査による耳鼻咽喉科診療に対する会員の意識調査を行なった。その内容は、現在力を入れている診療と今後力を入れてゆく診療の確認であった。本調査結果が、1：耳鼻咽喉科診療の充実かつ発展、2：新たな診療分野の開拓、3：医学生と初期研修医の耳鼻咽喉科診療への興味発掘につながることを願っている。

方法

アンケート調査はメールアドレスが登録されている会員に対してウェブアンケートを2022年7月10日から2022年7月31日まで行った。アンケートウェブサイトはGoogle Formsを使用した。アンケートに回答することにより、本調査に同意を得たものとみなした。アンケートの発信元は記載を求めず匿名化をはかった。アンケートの項目は別に示す。[\(資料1\)](#)

回答数



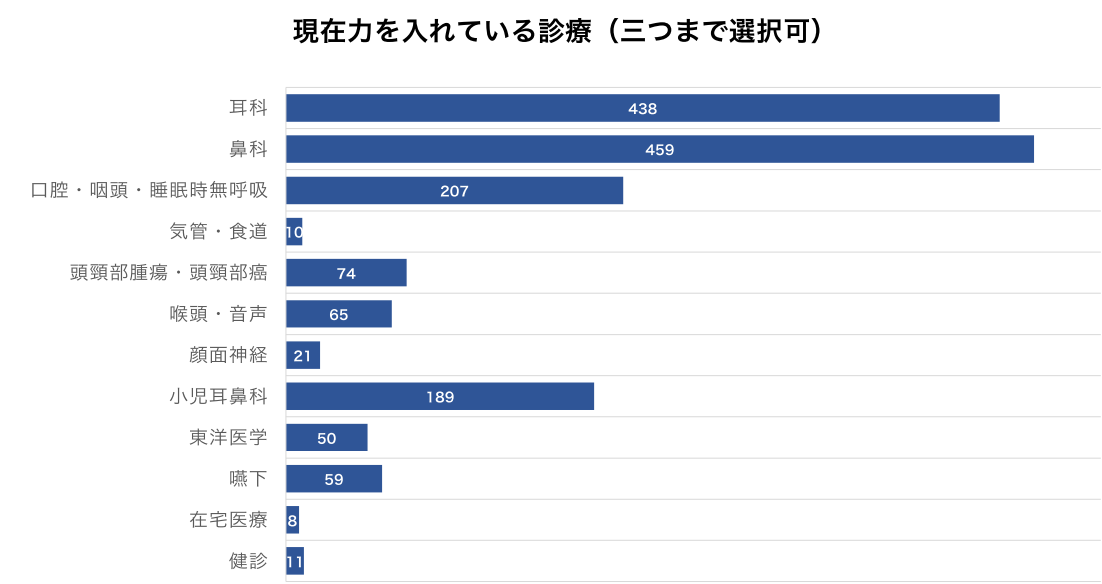
Frequency	Count
Often	521
Sometimes	86
Rarely	57

回答数 664 日本耳鼻咽喉頭頸部外科会員 5 %、日本臨床耳鼻咽喉科学会会員数 8 %

必要サンプル数 許容誤差 5 % 信頼度 95 %
日本耳鼻咽喉頭頸部外科会員 372、日本臨床耳鼻咽喉科学会会員数 365

現在力を入れている診療（3つまで選択可能）

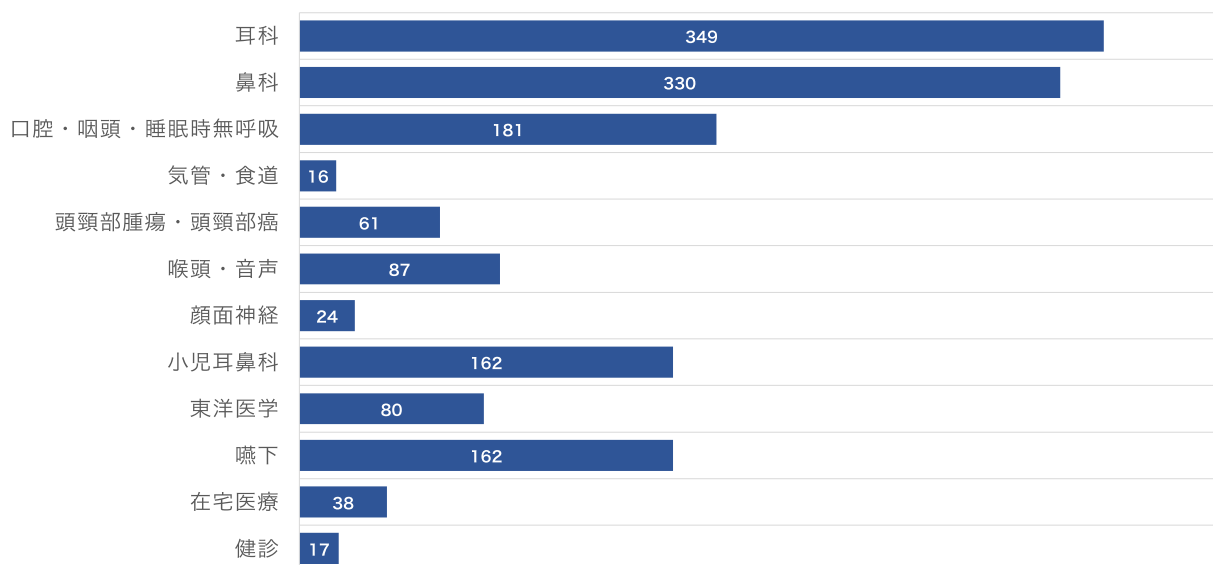
耳科と鼻領域が多く、回答数の 65～70%を占めた。続いて口腔・咽頭・睡眠時無呼吸と小児耳鼻科領域が多くそれぞれ 30%を占めた。頭頸部腫瘍・頭頸部癌、喉頭・音声、東洋医学および嚥下領域が 10%前後を占めた。在宅医療と健診の領域も両者を合わせると 3%を占めた。小児耳鼻科診療に力を入れている会員が比較的多く、その一方嚥下診療については比較的少ない結果であった。在宅医療と健診に力を入れている会員も少なからず存在したことは注視すべき点と考える。



今後力を入れてゆく診療は何ですか（3つまで選択可能）

耳科と鼻領域が多く、回答数の 50%を占めた。続いて口腔・咽頭・睡眠時無呼吸、小児耳鼻科領域及び嚥下領域が多く 25%を占めた。喉頭・音声、東洋医学および頭頸部腫瘍・頭頸部癌が 10%前後を占めた。

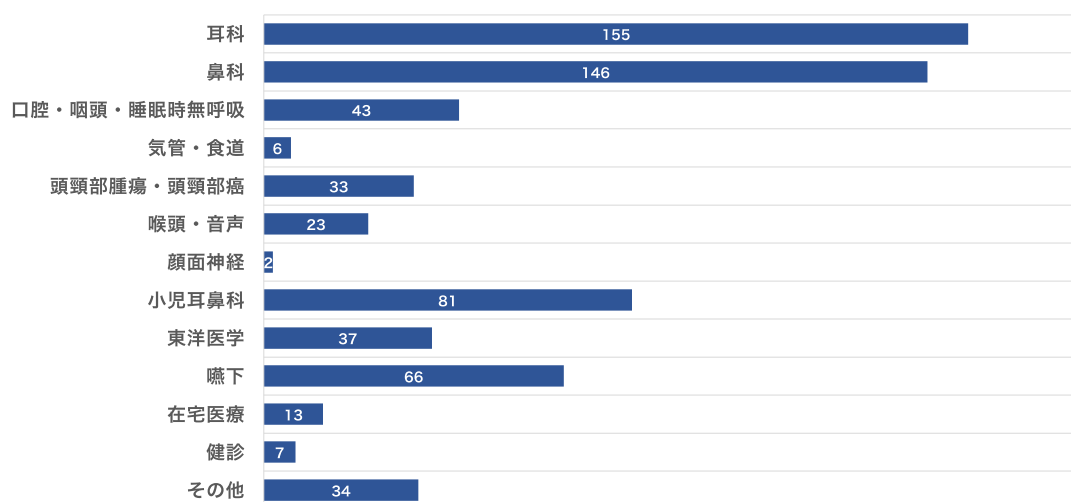
今後力を入れてゆく診療（三つまで選択可）



今後力を入れてゆく診療は何ですか（一つを選択）

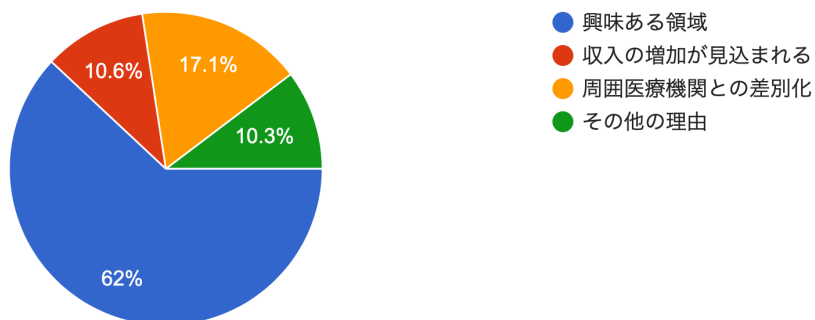
耳科と鼻科が回答数の25%を占めた。小児耳鼻科12%および嚥下10%が続いた。その領域を選択した大多数の理由は興味ある領域であることであった。次に診療形態別に結果を検討した。大学附属病院においては教授または診療科長の考えに左右される現実があるが、全国的に見れば耳科、鼻科、頭頸部腫瘍・頭頸部癌、小児耳鼻科、嚥下診療など比較的多方面に満遍なく向けられている結果であった。全国としてはバランスが取れていると考えられる。一般病院・センターにおいては耳科、鼻科、頭頸部腫瘍・頭頸部癌より嚥下診療が多い結果となった。がんセンターが含まれること、地域中核病院は嚥下診療の需要が多いことが考えられた。診療所においては耳科、鼻科がかなり多く、小児耳鼻科、嚥下診療と東洋医学が続いた。頭頸部腫瘍・頭頸部癌は著明に減少した。診療所における診療対象疾患が反映され、嚥下診療と東洋医学に力を入れる会員が比較的多いことは注視すべきと思われた。

今後最も力を入れてゆく診療（一つ選択）

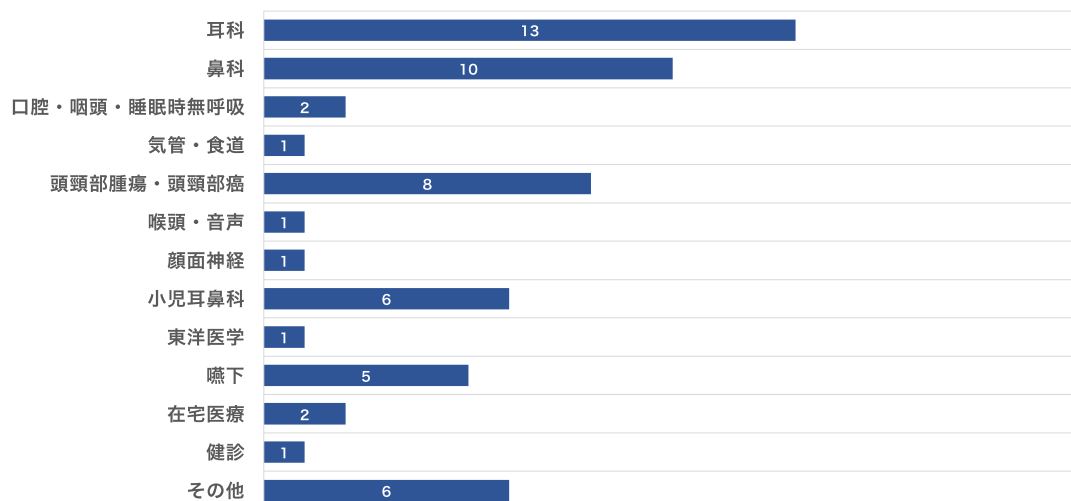


選択した理由

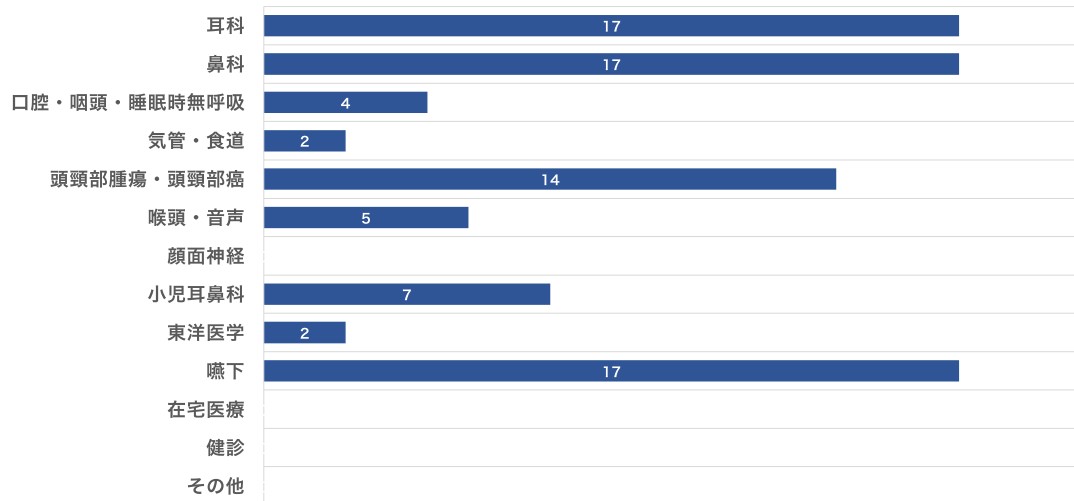
631 件の回答



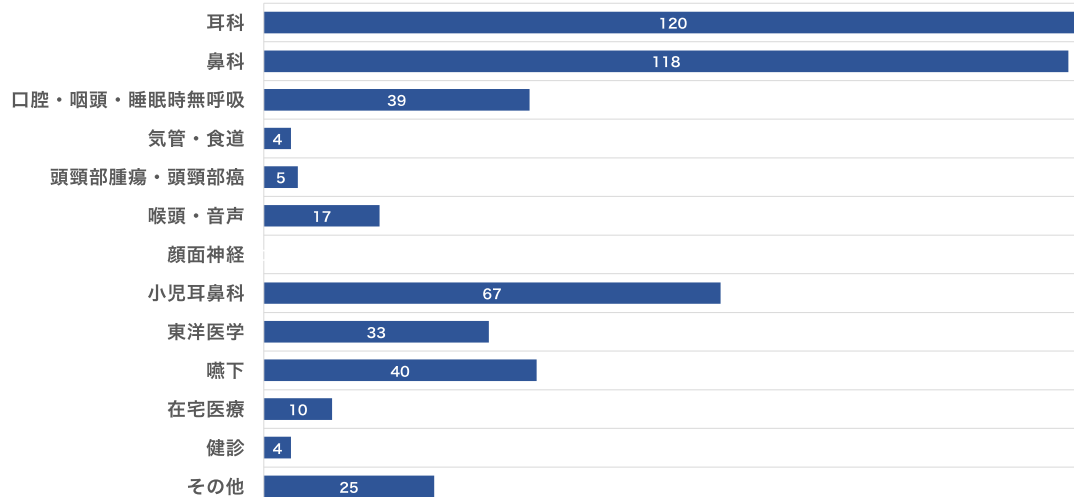
大学附属病院 今後最も力を入れてゆく診療（一つ選択）



一般病院・センター 今後最も力を入れてゆく診療（一つ選択）



診療所 今後最も力を入れてゆく診療（一つ選択）

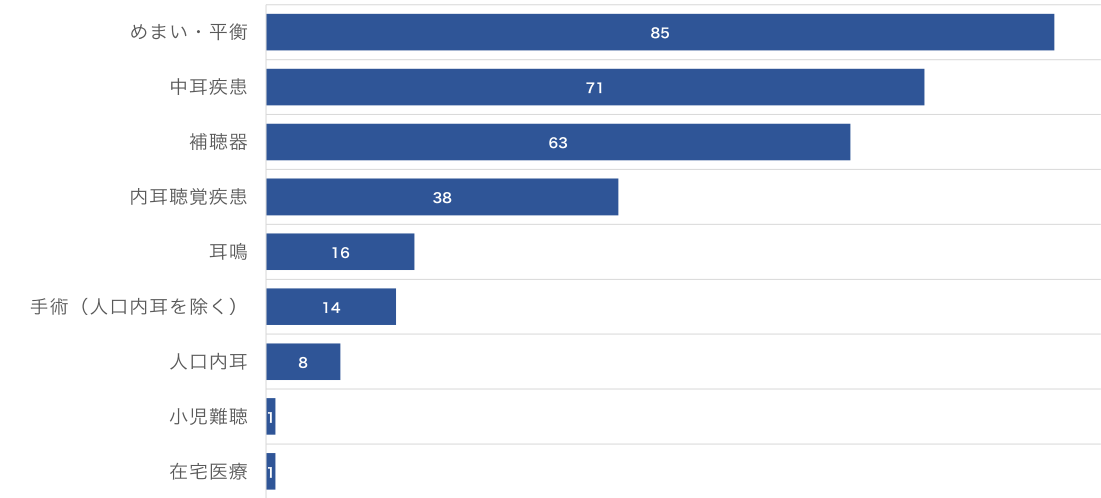


各分野における力を入れている診療内容（二つを選択）

耳診療

めまい・平衡、中耳疾患、補聴器の診療分野が多かった。

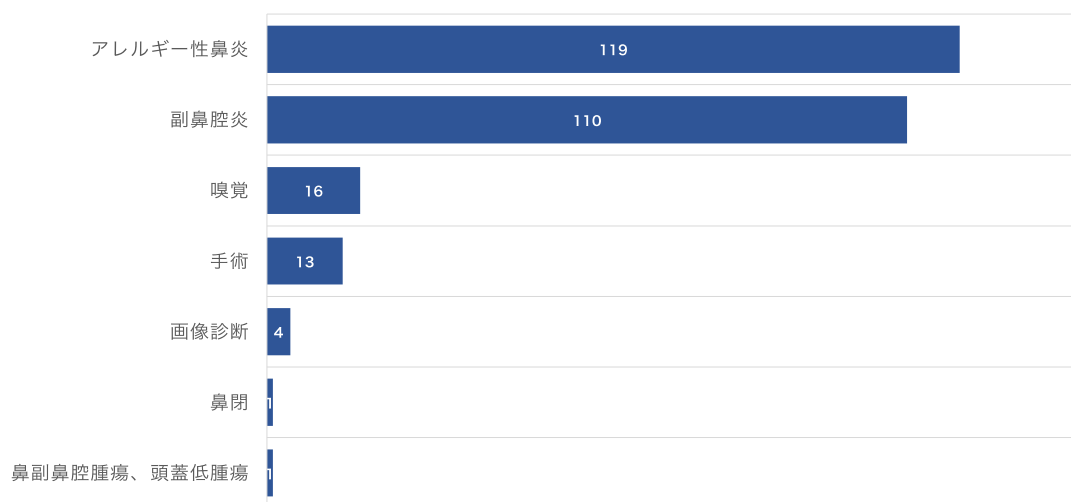
耳 今後最も力を入れてゆく診療（二つまで選択）



鼻診療

アレルギー性鼻炎、副鼻腔炎が突出して多かった。

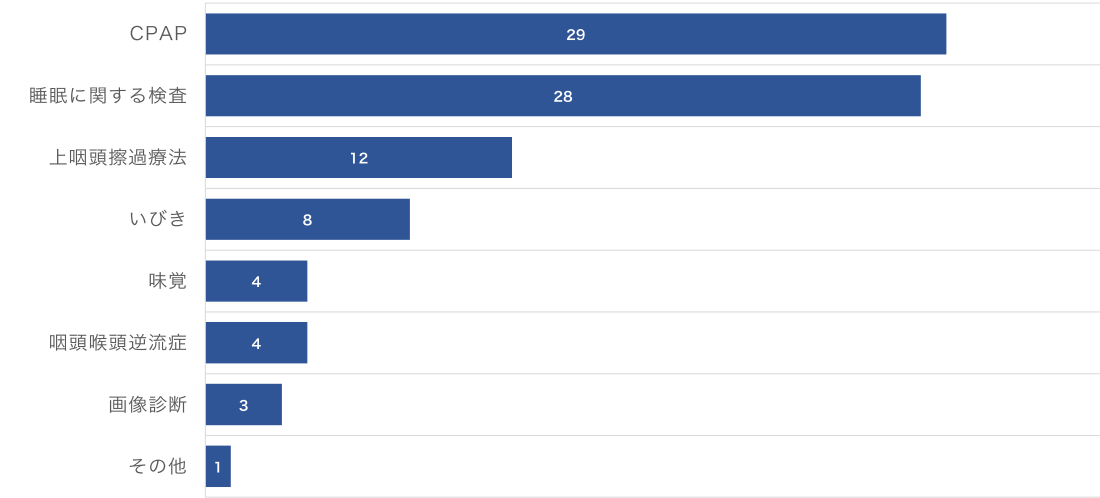
鼻 今後最も力を入れてゆく診療（二つまで選択）



口腔・咽頭・睡眠時無呼吸

CPAP、睡眠に関する検査が多かった。上咽頭擦過療法も注目されている。

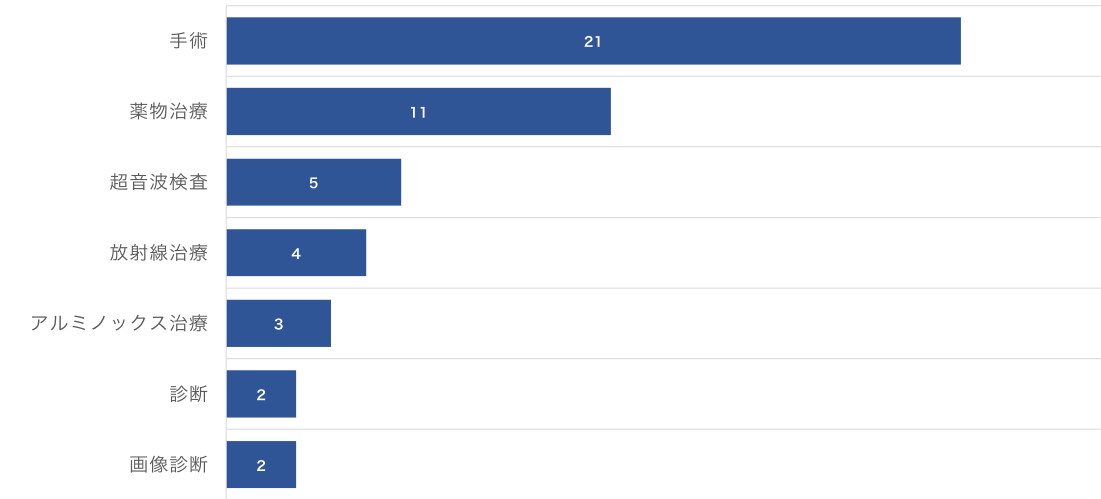
口腔・咽頭・睡眠時無呼吸 今後最も力を入れてゆく診療（二つまで選択）



頭頸部腫瘍・頭頸部癌

手術、薬物治療が多かった。

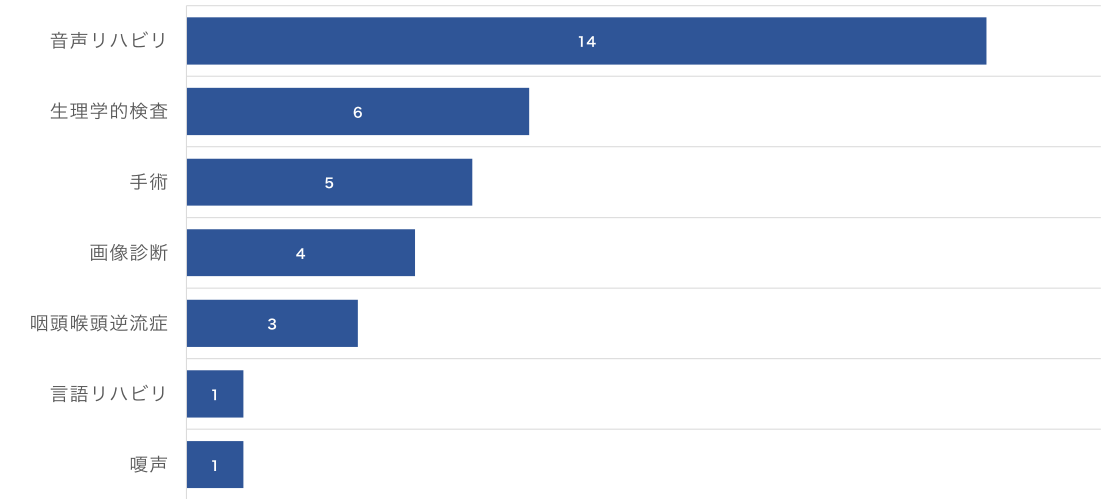
頭頸部腫瘍・頭頸部癌 今後最も力を入れてゆく診療（二つまで選択）



喉頭・音声

音声リハビリが多かった。

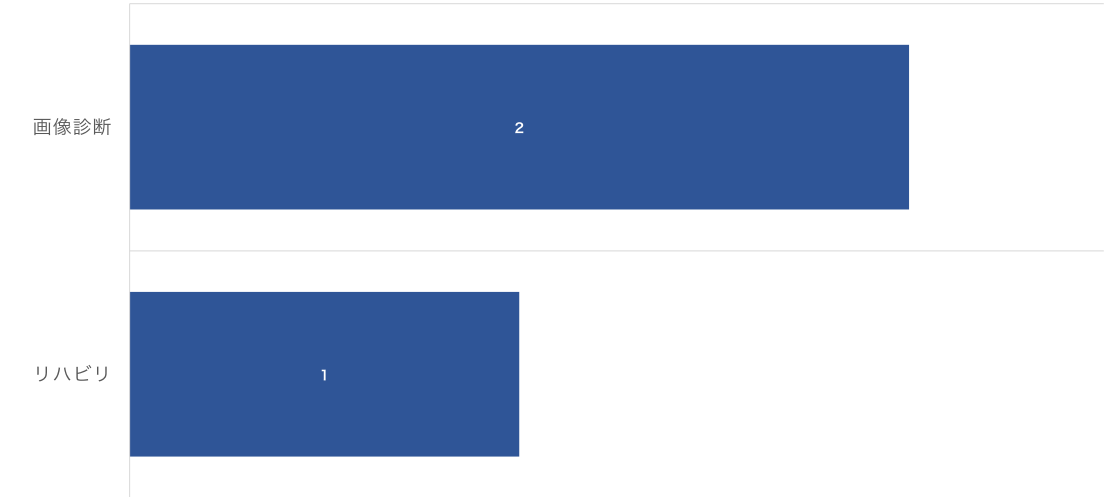
喉頭・音声 今後最も力を入れてゆく診療（二つまで選択）



顔面神経

回答数は少ないが画像診断、リハビリの順であった。

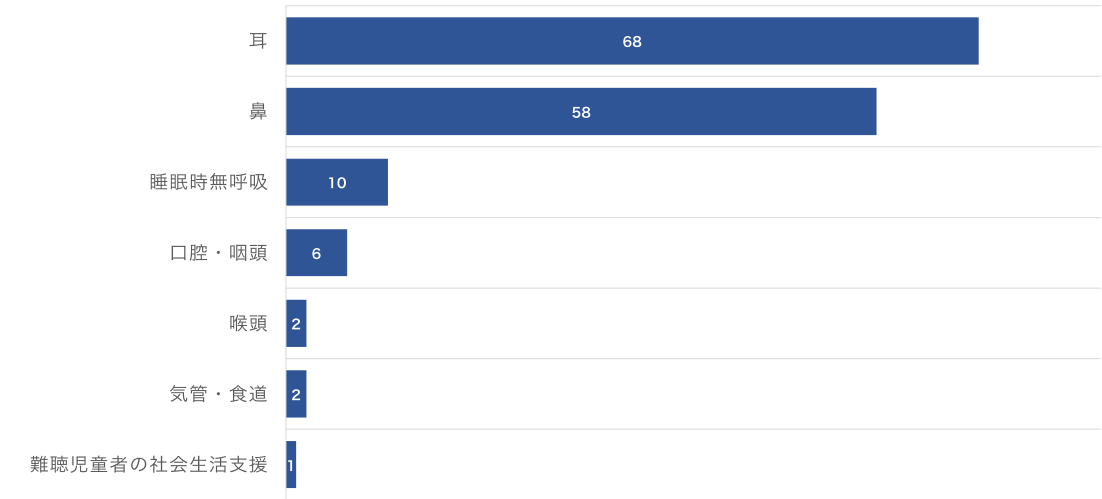
顔面神経 今後最も力を入れてゆく診療（二つまで選択）



小児耳鼻科

耳と鼻領域が突出して多かった。診療する傷病を強く反映していると考えられた。

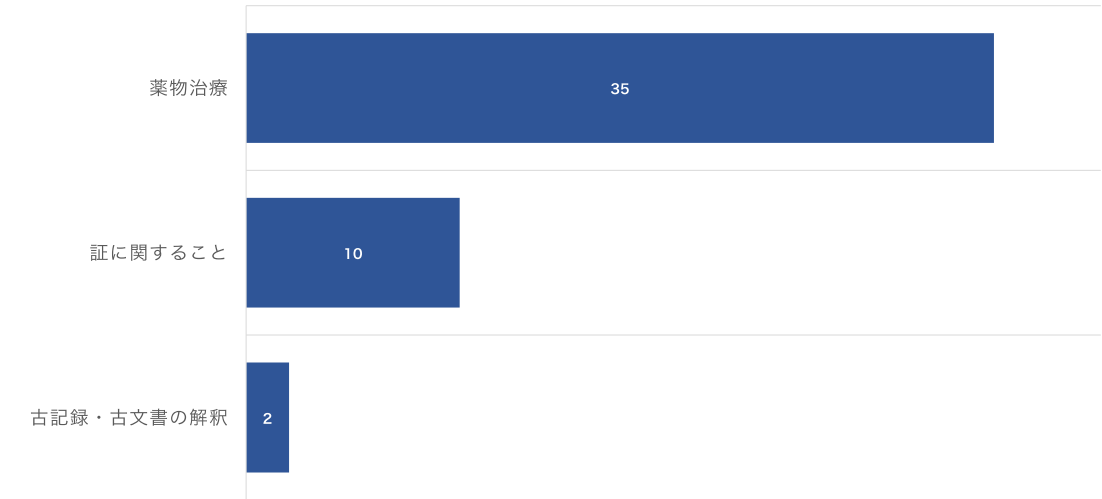
小児耳鼻科 今後最も力を入れてゆく診療（二つまで選択）



東洋医学

薬物治療が多かったが、証に関することにも興味が示された。

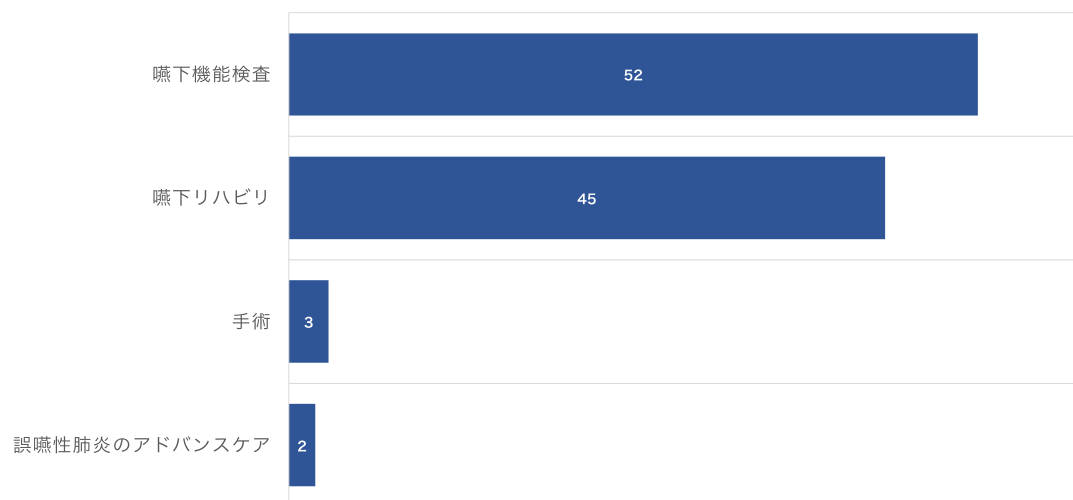
東洋医学 今後最も力を入れてゆく診療（二つまで選択）



嚥下

嚥下機能検査と嚥下リハビリが突出して多かった。

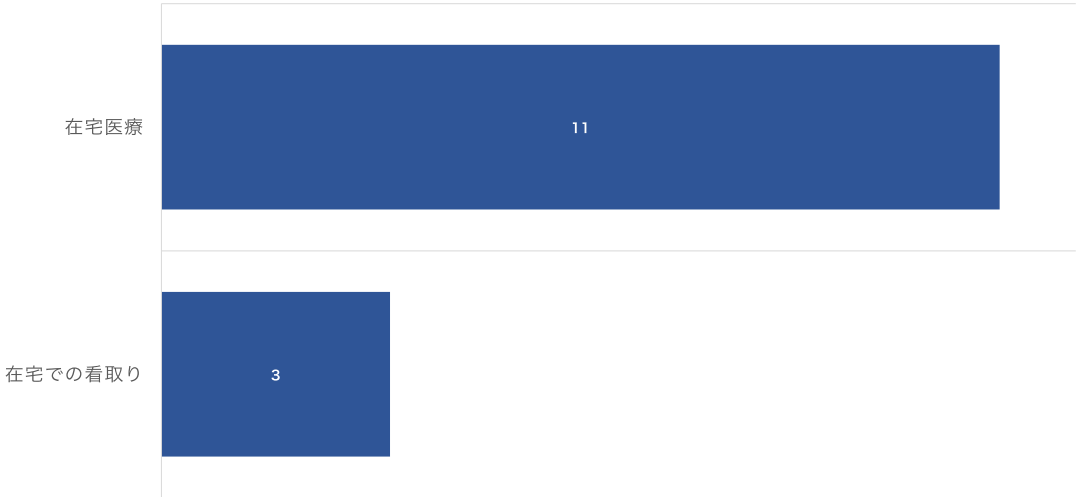
嚥下 今後最も力を入れてゆく診療（二つまで選択）



在宅医療

在宅での看取りを積極的にされる会員が存在することは注視すべき点と考えられる。

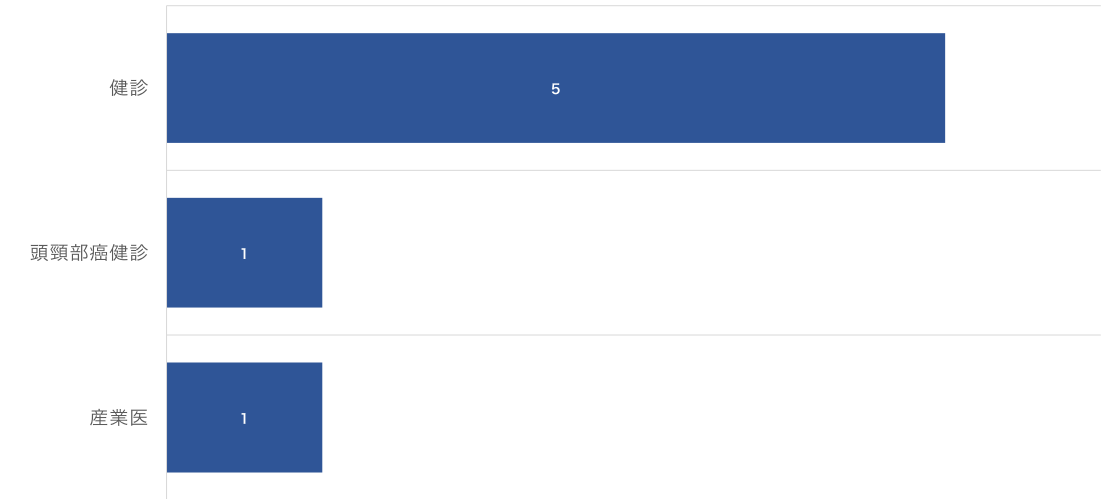
在宅医療 今後最も力を入れてゆく診療（二つまで選択）



健診

産業医として従事されている会員が存在することは注視すべき点と考える。

健診 今後最も力を入れてゆく診療（二つまで選択）



まとめ

現在力を入れている診療の多選択（3つまで選択）においては、約2／3の会員が耳科または鼻科を選択した。逆に約1／3の会員が選択していなかった。耳鼻咽喉科領域の広い診療域を示すものであり、自分の特化した専門領域を深く探求する会員の意向も示唆される。約1／3の会員が口腔・咽頭・睡眠時無呼吸または小児耳鼻科領域を選択していた。睡眠時無呼吸の診断と治療に携わる会員が多いことと小児の診療を行う機会が多い実態を示している。今後力を入れてゆく診療については複数選択または一つ選択した場合には、会員全体としては耳科と鼻科が多く、続いて小児耳鼻科と嚥下が多かった。日常の診療において小児を扱う機会が多いこと、学会及び医会の嚥下診療に関する啓蒙活動の結果と考えられる。大学附属病院においては教授または診療科長の考えに左右される現実があるが、全国的に見れば耳科、鼻科、頭頸部腫瘍・頭頸部癌、小児耳鼻科、嚥下診療など比較的多方面に注力がむけられている。その結果全国としてはバランスが取れていると考えられる。一般病院・センターにおいては嚥下診療が最も多く耳科、鼻科、頭頸部腫瘍・頭頸部癌より多い結果となり、日常の診療において嚥下診療の需要が高いことをうかがわせた。診療所においては耳科と鼻科が多く、続いて小児耳鼻科と嚥下診療が多かった。小児の診療、耳科と鼻科が多い日常の診療が反映され、診療所においても嚥下診療に注力する会員の意識が示されている。